9　小児の歯肉炎に対する臨床的検討

○春岡龍男、橋本敏昭[*]、西田郁子[**]、牧憲司[**]
木村光孝[**]

はるおか歯科・小児歯科、
[*]はしもと小児歯科、[**]九歯大・小児歯

小児の歯肉炎は、臨床において成人の歯周炎同様、とくに近年増加傾向にある。とくに保険診療を中心に治療が行われるためか、齲蝕処置に対する家庭の関心のほうがまだまだ高く、母親たちの目が歯肉にまで向いていないのが実状である。

小児の歯肉炎は成人の歯周炎に比べ、治療を行わず放置した場合でも重篤な状態に移行することがほとんど観察されないため、治療に対して消極的であることも事実である。齲蝕処置を中心として治療を進めながら、術者と、小児の保護者に対し、目を歯肉へ向けさせることの臨床的意義は大きいと考えている。また、「成人の歯周疾患の根源は小児期にある」という警告がMaCallから報告されている。しかし、保険制度という枠内では、小児の歯肉炎に対し積極的に取り組み難い状態であることも現実ではある。

演者らは、臨床上認められる小児の歯肉炎に対し、プラークにより発症していると思われる数症例に対し、X線診査を行い、プラークの状態を独自に評価する方法で確認しながら、母親の協力を得て治療にあたった。治療内容はブラッシングが中心であり、スクラッビング法と、スティルマン改良法を患者に合わせ改変したものを用いた。

とくに今回は母親への歯肉炎の意味付けが十分に行われるよう、医院での衛生士と母親とのコミニュケーションがとれていることを前提として治療を行い、理解が得られていないものとの差異についても十分に配慮を行った。

以上のことから、良好な結果が得られたので報告する。

10　おやつの選択基準に関する調査

○入江英仁　伊東泰蔵　緒方恵理　川口辰彦
小林泰子　瀬尾令士　前田章二　松本晉一

熊本小児歯科懇話会

我々、熊本小児歯科懇話会は、昨年７月に設立以来、現在まで低年令児の齲蝕の抑制を活動の１つの柱として来た。その際さけて通れない問題が子供の食生活であり、特に今回取りあげたおやつ（間食）の持つウエイトは非常に大きい。一方、「幼児にとっておやつ（間食）は、３回食では摂取しきれない栄養とエネルギーの補いであり、同時に子供に楽しみを与えるものである。」という聞きなれた説明、概念は、現実の子供達の食生活の中で本当に定着しているのだろうか。あるいはもう風化してしまった言葉なのではないだろうか。この様な危具を感じたのをきっかけに、子供達がどの様なおやつを食べたり、どの様な与えられ方をしているのかを当会会員のもとへ来院した、就学前の子供達を対象にアンケート調査を行った。その結果、子供達の年令の上昇とともに手づくり食品が減少し、既製品の菓子類が多くなる傾向が認められた。当然ながら、これらの既製品の菓子類は、”お八つ＝栄養の補い”という意味合いは殆どなく、もっぱら子供達の楽しみの追求により選択される傾向が見られ、その選択者も子供自身であることが多くなっている。そこで更に、おやつの選択権は誰が持っているのか（親か子か）、選択権が親から子へ移行していくのはいつ頃か、また移行させる要因は何か等について、幼稚園、保育園児を対象にアンケート調査及び聞き取り調査を行った。その結果、興味ある知見を得たので報告する。